

平成 29 年 11 月 24 日

関係各位

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学
教授 片渕秀隆

拝啓

熊本県小児科医会の要請で4年ぶりにHPVワクチンのまとまった講演をさせていただきました。ワクチンのプロである小児科の先生達にいろいろな質問を頂き、必ず再開されることを信じて、社会に正しい情報を提供し続けることの重要性を改めて知らされました。

来春出版される日本産科婦人科学会編の「産科婦人科用語集・用語解説集 改訂第4版」の編集を委員長として担当しています。本書は、京都大学の岡林秀一教授が1934(昭和9)年に『産科学婦人科学学術用語彙第1版』が出版されたことに遡ります。今回の改訂では、全ての産婦人科医の必携となるよう内容を一新しています。Johns Hopkin 大学留学の時から友人である久具宏司先生(同副委員長)に9つのコラムをお願いしました。その中のひとつ、私も以前回診で話題にした大綱に関するコラムを紹介します。

「Omentum は“だいもう”ですか?“たいもう”ですか?”と手術中に聞かれた。それまで“たいもう”と呼び慣わしていたから、とっさに“たいもう”ですと答えた。その後いろいろと考えた末、今では“だいもう”と読むことにしている。その理由は、「小綱(しょうもう)」の存在である。人体のさまざまな解剖学的部位の名称には、「大一」、「小一」と同じ名称の上に大小の文字をつけたものがある。「大脳と小脳」、「大腸と小腸」、「大胸筋と小胸筋」、「大泉門と小泉門」…枚挙に暇がない。これらの読み方はすべて「だいー」、「しょうー」である。「大綱」についても、「小綱」が存在する以上、この2つは大小の対になっていると考えられるので、それならば読み方は、「だいもう」、「しょうもう」であろう、というわけである。もしも「小綱」が存在しなければ、決め手がなく、どちらでもよいと考えたであろう。医学用語以外に視野を広げてみると、「大一」、「小一」で対になっていることばでの「大」の読みは、やはり「だい」が多いように思える。「大便と小便」、「大規模と小規模」、「大三元と小三元」、「大乘仏教と小乗仏教」など。世界地図を広げると、「大スンダ列島と小スンダ列島」、「大興安嶺山脈と小興安嶺山脈」、「大アンティルと小アンティル」なども目に留まる。しかし、二十四節気の中の大小の対語は、「大寒」が「だい」であるが、「大暑」と「大雪」は「たい」と読まれている。これらの例からみて、一概に“大綱”の読みを“だいもう”と決めるのには躊躇もあるが、医学用語における大小の対語での読み方の例外が見出せないので、「だいもう」を第一選択の読み方としておくのがよいであろう。

12月と新年1月の予定表を同封致しました。12月28日(木)の午後7時から、恒例の教室忘年会をホテル日航熊本で行います。沢山のご来場をお待ちしております。

敬具